

コラム 32：酒場放浪記

(2014. 5. 20)

たった一人で旅をした時に、心が休まる場所というのがありますね。それが私の場合は居酒屋なのです。それも小ざれいで上品な店や、大きなチェーン店というのではなく、地元の人がいつも集まっているような、古い暖簾のかかっている「赤ちょうちん」というのがいいのですよ。そんな所で、冷たい生ビールと美味しいツマミに出会えば、生来「飲んべ」の私は自分の人生の「至福の時」を感じますね。

東京・練馬の居酒屋「金ちゃん」については、これまで何度も、このコラムに書いています。「コラム6：東京雑感」でも写真入りで載せていますし、以前の会社時代の「おっさんのつぶやき」でも何度か登場しているのですが、今回も触れないわけにはいきません。若き日の思い出のみならず、会社時代も上京の折には必ず立ち寄ったものですよ。小さな「もみじ饅頭」を手土産に持って……此処は私の人生の、沢山の思い出の詰まった、一番心安らぐ場所なのです。

本年の2月28日、西武池袋線 練馬駅に着いた時は午後9時を過ぎていました。改札を出てから大通りの信号にかからなければ、ほんの一分程度で店に着きます。今回は妻を伴っての来店です。暖簾を分けて、ガラス戸越しに中を覗くと、席は満席状態、相変わらずの盛況のようです。扉を引いて中に入ると、出口の脇で白い割烹着にねじり鉢巻きという、いつもの格好でオヤジが働いています。「おう、来たの」いつもどおりの不愛想な声掛け。私と妻はカウンター席の中に少しばかりの空席を見つけ、二人して押し込むように座ると、「そこちよっと寄ってくれる」オヤジが気遣ってくれます。座り込むと、私はすぐに注文。「生ビール大と煮込み！もつ焼きは、タン、ハツ、シロをタレで2本ずつ！」下戸の妻は野菜の串焼きとトマトを注文。すると、いつものカウンター担当のオバサンが、料理の注文を大声でオヤジに向かって復唱し、伝票を書いてカウンターに挟みます。いつもと変わらぬ店の風景です。



注文とほとんど同時にやってきた生ビールで喉を潤し、煮込みを一口、これが食べたかったのですよ！このために此処に来たようなものです。オヤジが炭火で焼いてくれる一本80円のモツ焼もうまいですが、私のおすすめは何といっても一皿330円の煮込みなのです。いろんな居酒屋で煮込みを食べましたが、私はこのような味に出会ったことはありません。「臭みを見事に取り去った柔らかな舌触りのうちに、ホルモン(内臓肉)の旨味が凝縮されている」という感じなのです。ここで食い物に対する想像力と表現力が、私に欠如していることを自覚しました。それゆえ、私の敬愛する作家、開高健(注1)の一文を拝借したいと思います。

「愉悦と愕きが射してくる。愕きはやがて感嘆に変わってゆく。あなたが箸でつまんだのは牛か豚かの、胃、腸、肝臓、腎臓、子宮などであったが、それが完璧に血抜きされているのでヘンな匂いがどこにもなく、とろとろに煮とろかされ、いっぺからざる一抹の固有性と滋味をそれぞれに保持しつつお粥のなかにとけこんでいる」

(白いページ① 食べる の項より)

これは東南アジアの何処かの国で、場末の中華街にある屋台の「モツの入った支那粥」を氏が食べた時の一文です。見事にホルモンの美味さが表現されているのではないですか。



隣の席の若い会社員風の男が、オヤジに本を渡しています。「この本に此処が載ってるよ」オヤジが本を開いて喜んでいいます。私も興味を持って見せてもらいました。表紙には「酒場放浪記」(注2)とあり、店内の様子と料理が、オヤジの顔の大アップ写真とともに紹介されています。「おもしろいね。これ何処で買ったの」「練馬図書館で借りたんですよ」「これ欲しいな。ネットで買えるかね」「大丈夫じゃないですか」少したって彼の方から話しかけてきました。「今、スマホを見たらアマゾンで900円で出てますよ」最近の若いモンもいいトコがありますね。「ありがとうね！」

時間は10時半を過ぎていきます。店じまいが近づき、客も減ってきました。「オヤッさん、また来るワ」勘定をすまし、いつものように写真を撮ろうとすると、オヤジは少し酔っているようで上機嫌。「カアチャンも一緒に撮ろうや」と言って、店の女の子を呼んで私のデジカメを渡します。そして妻を含め三人で一緒にパチリ。オヤジは私より10歳くらい上の筈ですから、推定70台半ば。1964年の東京オリンピックの年に船員をやめて店を始めたと言っていましたから、今年でちょうど50年ですか。月曜から土曜まで週6日、あさの9時に仕込みを始めて夜中まで、よく働いてきたものです。「オヤッさん、景気はどう？」と聞くといつも同じ答えが返ってきます。「うちのような安い店は景気は関係ねえよ。いつもいっしょだ！」……「金ちゃん」は、いつ行っても満席なのです。

「オヤジ、もうええ年なんじゃけえ、無理せんようにやりんさいよ。ワシも広島で負けんようにガンバルわい！」



(注1)開高健(かいこう たけし)作家(1930～1989) 27歳の時に「裸の王様」で芥川賞を受賞。代表作「日本三文オペラ」「輝ける闇」「夏の闇」他。

35歳の時ベトナム戦地取材のため第一線に従軍。「ベトナム戦記」を刊行。「ベ平連」の呼びかけ人となる。「最後の晚餐」「フィッシュ・オン」「オーパ！」など「食と釣り」に関する著作が多数あり。食道癌により58歳にて死去。

(注2) 私はこの後にネットで手に入れました。
「吉田類の酒場放浪記」(TBS サービス発行)

◎表紙に書いてあること

BS-TBS (TBS 系) にてマニアックな人気を誇る、
あの「吉田類の酒場放浪記」が本になった！
酒場という聖地へ 酒を求め、肴を求めさまよう…

